南戯『劉希必金釵記』明宣徳鈔本校議（2）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2013-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福満, 正博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13527

明治大学教養論集　通巻430号
(2008・3) pp. 1-8

南戯『劉希必金釵記』明宣徳鈔本校議(2)

福　満　正　博

19.7　原文は「後世已顕父母孝之」,「已」は「以」と通仮。二つの字は共に中古音で，止摂上声止韻喩母。

20.1　原文は「听啓」。「听」の字の本義は，笑うさまである。『説文解字』に「笑皃也，从口斤聲」とある。中古音では「宜引切」，臻摂上声軫韻疑母。梅膺祚の『字彙』には，「聽，丁去声，聆也。從也。今誤作听」とある。また，張自烈の『正字通』には，「听，…俗借為聽字省文，誤」とある。つまり後世に聴の字に誤用されたというのである。『劉知遠諸宮調』,『元版 孝經直解』,『五代史平話』,『全相平話三国志』,『元刊雑劇』,『元典章』,『明成化説唱詞話』などでは，頻見する。

20.4　原文は「 」。「香」の草書体。『五體漢字彙編』に「 」(元・陸居仁，行書跋）とある。『元刊雑劇』(冤家債主）に「 」とある。

21.2　原文は「 」。「義」の草書的楷書。『草書の字典』に「 」(東晋・王羲之）とある。『香山記』に「 」とある。

21.5　原文は「 」。「再」の異体字。『漢魏南北朝墓誌集釋』に「 」とある（隋・宋睦墓誌：開皇十八年十月十二日，図三九七)。また「 」(唐冀州刺史息武君欽載墓誌：『千唐誌齋藏誌』垂拱四年十二月八日）のような書体もある。『五體漢字彙編』にも「 」(宋・米芾，書蹟拓本）とある。また，『元版 孝經直解』,『古列女傳』,『全相平話三国志』,『元刊雑劇』(魔合羅),『元典章』,『明成化説唱詞話』なども「 」に作

る。「ちなみに，『明清行草字典』によれば，陳淳，陳元素，呉寛などをはじめ，明清時代には少なくない書体だったようである。『説文解字』には「一擧而二也。从一，冓省。」（一を挙げて二となるなり。一に従い，冓の省なり）とある。会意の字である。この字体の「再」の字の下半分に縦線がないのも，この「二」の意味を強調しているのかもしれない。馬叙倫は『説文解字六書疏證』に「再為層疊之層初文。再声之類。層声蒸類。之蒸対転。故再転注為層」（巻八）としている。「冉」は別字。

21.5　原文は「段」。劉念茲は「改」の字に読み，陳歴明は，「段」の字に読む。「段」の字の異体字として，『漢魏南北朝墓誌集釋』に，「段」（北斉・司馬遵業墓誌銘：天保四年二月二七日，図318）が録されている。『元刊雑劇』（看錢奴）は「段」に作り，『明成化説唱詞話』も「段」の字を「段」に作る。書手が，「改」の字を，字形の類似した「段」の字に書き誤ったとする可能性がある。しかし，「改」の字の異体字には「改」（北海相景君銘：『中国書法全集』7，63図）と「改」（大唐故張君之墓銘：『千唐誌齋藏誌』貞観三年十一月四日）も録されている。『龍龕手鑑』には「段，音改，更也」とある。「改」の字の異体字と考えることもできる。待考。

21.5　原文は「換」。「換」の草書体。『草書の字典』に「換」（宋，米芾）とある。

21.6　原文は「故管」。「故」は「故」の異体字。劉念茲は，「顧管」に校す。「故」と「顧」は，同音。

23.7　原文は「儕」。「儕」は，中古音では蟹摂平声皆韻崇母開口で，『漢語方言字彙』によれば潮州方言で ts'ai[55] となる。「済」は，中古音では蟹摂去声霽韻精母開口で，『漢語方言字彙』によれば，潮州方言で tsi[213] となる。他のすべての方言区でも二字は音が異なるので，二字は通仮ではなく，字形の類似により「済」の字を「儕」に書き誤ったと言うことが

分かる。

23.8　原文は「奈」。「奈」は，中古音では蟹摂去声泰韻泥母開口で，『漢語方言字彙』によれば潮州方言で nãĩ^{35} となる。「耐」は，中古音では蟹摂去声代韻泥母で，『漢語方言字彙』によれば潮州方言で nãĩ^{35} となる。この二字は中古音では異なるが，中原音では同音となり，全ての方言区でも同音である。「奈」と「耐」とは近代以降すべての地域で同音であり，「奈」は「耐」の字の通仮である。

24.3　原文は「 」。25.2 では「 」となっている。この例のほうが多い。51.5 では「 」となっている。「邊」の字の草書的異体字である。『劉知遠諸宮調』，『全相平話三国志』，『元刊雑劇』，『五代平話』，『楽府新編陽春白雪』，『明成化説唱詞話』なども「 」となっている。また『草書の字典』に「 」（明，祝允明）とある。

24.7　原文は「禧神 」。劉念茲は「禧神願」に校し，陳歴明は「禧神祈」に校す。39.2 に「告神祈」の例があり，また曲牌「憶多嬌」がここで「希」・「貴」・「棄」などと韻をふんでいるところから見て，原文は「祈」の字の誤記と思われる。

25.2　原文は「 」。『元刊雑劇』（焚児救母）にも「 」とある。『宋元以来俗字譜』は，『目連記』にも「」とあるとする（未見）。

25.2　原文は「計」。劉念茲は「既」に校し，陳歴明は「計」のままにする。「既」は中古音で止摂去声未韻見母 3 等開口である。「計」は蟹摂去声霽韻見母 4 等開口である。『漢語方言字彙』によれば，潮州方言では，「既」が ki^{213}，「計」が koi^{213} で二字の音は異なっている。南の潮州を含めた広州・陽江・厦門（文言音）・福州（文言音）の方言区では，両字の音が一致しない（ただし建甌では ki^{22} で一致する）。潮州一帯の方言音では，通仮が説明出来ないのである。ところが北方から蘇州・温州を経て梅県までの方言区では一致する。ともかく，この場合，他にも本文の 40.3 に「計然完備，…」という例があるので，劉念茲のように「既」

に校するほうが優っているといえる。

25.4　原文は「美」。「美」の異体字。『老子甲本』第97行に「美」（『馬王堆漢墓帛書』）とある。後漢の「曹全碑」にも，「美」（『漢代石刻集成』126）とある。『敦煌俗字典』にも「美」（P.2965）とある。『五經文字』に「美，從羊從大。從犬從火者訛」とある。『古列女傳』，『大唐三藏取經詩話』，『劉知遠諸宮調』，『元刊雜劇』などでも頻見する。

25.5　原文は「女」。「孃」の異体字。『説文解字』に「孃，煩擾也。从女襄聲」とあるように，本来は，煩わしいの意味。母の意に用いるのは，仮借である。段玉裁は『説文解字注』に，「又按，廣韻孃女良切，母稱。娘亦女良切，少女之号。唐人此二字分用畫然。故耶孃字断無有作娘者。今人乃罕知之矣」とする。『敦煌俗字典』に「娘」（S.3704）がある。『元刊雜劇』，『明成化説唱詞話』が「女」に作る。

25.5　原文は「婦」。この字体は他に26.3と28.2に見える。「帰」の字の誤記と思われる。

25.7　原文は「新」。46.1などでは「新」に作る。「新」の異体字。『元刊雜劇』（調風月），『元典章』，『明成化説唱詞話』などに見える。

25.7　原文は「親」。「親」の異体字。『元刊雜劇』，『明成化説唱詞話』などに見える。

25.8　原文は「辦」。劉念兹は「辮」に校し，陳歴明は「半」に校す。意味的には「半」の方が勝ると思われるが，音声から見ると「辦」は山摂去声襇韻並母2等開口，「半」は山摂去声換韻幇母1等合口である。「辦」は「半」の通仮とは考えられない。ここは単純に「辦」の字の異体ないし誤記と考えた方がいいだろう。『説文解字』にも「辦，判也。从刀辡聲」とあり，「辦」の字の本義の通りである。

26.2　原文は「养」。「養」の異体字。『元刊雜劇』，『楽府新編陽春白雪』，『明成化説唱詞話』などに見える。

26.3　原文は「撇様」。陳歴明は，「帮様」に校するが誤り。劉念兹が，「撇

漾」に校している通り。『廣碑別字』には「蔽」の字を「蔽」(唐，文林郎王貞墓誌銘：『千唐誌齋藏誌』長安三年二月十四日）にした例がある。『元刊雜劇』では，「拝月亭」・「調風月」に用例があるが，「調風月」では「撇漾」となっている。原文は「撇」の異体字といえるかも知れない。「様」と「漾」は，同音。

26.3　原文は「撕把」(漫漶)。陳歴明は「撕」を，「漸」に校する。呉文英の詞「瑞鶴仙」に，「又争知，吟骨縈銷，漸把舊衫重翦」(『全宋詞』)という句がある。劉念茲は，文脈から「撇」に校する。「把」は，潮州方言の白話音で pe[53] であり，「白」は peʔ[53] である。「撇白」のような語の通仮と考えられるかもしれない。待考。

26.3　原文は「夘央」。「鴛鴦」の略字。『元刊雜劇』や『楽府新編陽春白雪』などに頻見する。

26.7　原文は「春」。「春」の草書体。『行草大字典』に「春」(唐・懐素，秋興八首）とある。『元刊雜劇』(単刀会）にも「春」とある。

26.8　原文は「纔」。「纔」の草書的異体字。『元刊雜劇』，『全相平話三国志』などにも「纔」が見える。

27.3　原文は「竟」。「覚」の異体字。『敦煌俗字典』に「竟」(S126）とある。『古列女傳』，『大唐三藏取經詩話』，『劉知遠諸宮調』，『全相平話三国志』，『元刊雜劇』，『元典章』，『明成化説唱詞話』などに見える。

27.5　原文は「買」。「買」の異体字。『元刊雜劇』，『明成化説唱詞話』などにも見える。

27.5　原文は「书」。「書」の草書体。『居延漢簡』394.4 に「书」とある。また『五體漢字彙編』に「书」(晋・索靖，淳化閣帖）とある。『元刊雜劇』，『明成化説唱詞話』などにも見える。

27.5　原文は「望宸京尤在天袁」。「袁」は平声で「遠」は上声であるから，この場合「袁」は「遠」の字の字形の省略である。「尤」は平声尤韻匣母，「猶」は平声尤韻喩母。中古韻では声母が異なるが，古代からこの

二つの字は通仮として使われていた。「是時富豪皆争財，唯式尤欲助費」（『漢書』五十八）。元曲にも「日長也愁長，紅稀也信尤稀」（鄭光祖，「倩女離魂」）のような例がある。

28.1　原文は「由上」。「由」と「猶」は同音。「上」は音が二つあり，一つは宕摂上声養韻常母3等開口，一つは宕摂去声漾韻常母3等開口である。「尚」は宕摂去声漾韻常母3等開口である。二つの字は声調も異なるが，昔から通用されている。『詩経』に「父曰嗟予子行役，夙夜無已，上慎旃哉」（魏風，陟岵）とあるのがそうである。朱俊聲も「叚借，為尚」と『説文通訓定聲』に述べている。

28.3　原文は「 」（漫漶）。「懊」の異体字か。待考。

28.5　原文は「 」。「到」の草書体。『行草大字典』に「 」（宋・米芾，草書四帖）とある。『元刊雑劇』（七里灘）などにも見える。

28.6　原文は「」。「久」の異体字。武栄碑に「 」（『漢代石刻集成』）とある。『五體漢字彙編』にも「 」（東晋・王羲之，大観帖）とある。『字彙』に「 ，俗久字」とある。『古列女傳』『大唐三藏取經詩話』，『劉知遠諸宮調』，『元刊雑劇』，『元典章』，『明成化説唱詞話』，などにも見える。

28.6　原文は「拆」。「折」の字の誤り。「拆」は，山摂入声陌韻徹母2等開口，「折」は山摂入声薛韻常母3等開口である。方言音では，武漢・成都・合肥の三方言区で類似した音になるが，ここではそのような無理を考えるよりも，単なる字形の類似による誤りと考えた方がいいだろう。

30.4　原文は「」。「妝」の異体字。南唐の徐鍇の『説文解字繫傳』に「妝，飾也。從女牀省聲。臣鍇曰今俗作粧」とある。『敦煌俗字典』に「 」（Φ096）とある。

30.4　原文は「 」。「嗷」の異体字か。待考。

30.5　原文は「 」。「麼」の草書的異体字。

31.2　原文は「記」。「既」の通仮字。二字は，全ての方言区で同音。前稿の

17.8 参照。

31.4　原文は「𣶒」(漫漶)。「發」の異体字。『五體漢字彙編』に「𣶒」(北魏・鄭道昭，鄭道昭碑）とある。『元刊雑劇』にも「𣶒，𣶒」などが見える。

32.5　原文は「𣏟」。「林」の草書体。『草書の字典』に「𣏟」(宋・蘇軾）とある。

32.7　原文は「𦣞」。「旨」の異体字。待考。

33.1　原文は「認」。「忍」と通仮。「認」は臻摂去声震韻日母3等開口，「忍」は臻摂上声軫韻日母3等開口。二字の音が完全に一致するのは蘇州の zən^{31}（文言音），ȵin^{31}（白話音）の場合だけである。大部分の方言音では，音は同じであるが，声調が一致しない。特に潮州・厦門・福州の三方言区においては，二字の音が全く一致しないことが，注目される。

33.2　原文は「𥳑」。「紙」の異体字。『干祿字書』に「𥳑紙，上通下正」とある。『敦煌俗字典』に「𥳑」(S2073）とある。『全相平話三国志』，『元刊雑劇』などには「𥳑」が見える。

33.7　原文は「皃」。「貌」の本字。『説文解字』には「貌，籀文，皃从豹省」(大徐本）とあり，段玉裁も「今字皆用籀文」と述べている。

34.8　原文は「家偶」。「佳偶」のこと。「家」は中古音で假摂平声麻韻見母2等開口，中原音では家麻韻見母である。「佳」は中古音で蟹摂平声佳韻見母2等開口，中原音では，家麻韻見母である。この二字は，中原音では同音であり，また現在のほとんどの方言区でも声調も含めて全く同音である。しかし，潮州・広州・陽江の三方言区で，二字の音が一致しないのは注目される。

35.2　原文は「𠇍」。「代」の異体字。『漢魏南北朝墓誌集釋』に「𠇍」(北斉・法懃禅師塔銘，太寧二年一月，71下図）とある。『敦煌俗字典』にも「𠇍」(Дx00796など）とある。

35.4　原文は「彷」。「從」の草書的異体字。『草字林』に「彷」とある。

35.4　原文は「敕」。「嫩」の字の省略か。

35.6　原文は「逓」。「遞」の字の異体字。『隋唐五代墓誌滙編』（陝西巻 3-7）に「逓」（隋仁壽三年三月七日・蘇慈墓誌）とある。『敦煌俗字典』に「逓」（Φ096）とある。『正字通』に「逓，俗遞字」とある。『元刊雑劇』，『元典章』などに「逓」が見える。

35.7　原文は「禽」。「命」の異体字。『元刊雑劇』，『明成化説唱詞話』などにも見える。

35.7　原文は「摠」（漫漶）。「總」の字の異体字。『説文解字』に「總，聚束也。从糸悤声」とあり，段玉裁がこれに注して「俗作摠又譌作惣」とする。『隋唐五代墓誌滙編』（洛陽巻 1-63）に「摠」（隋大業七年四月六日・劉則墓誌銘）とある。『敦煌俗字典』に「摠」（P. 2965）とある。『元刊雑劇』（張元遇上皇）には「除睡人間摠不知」（耍孩児）とある。『楽府新編陽春白雪』（后集）に「要見除非夢，夢回摠是虚」（呂止菴，仙呂後庭花）とある。

36.6　原文は「催尊」。陳歴明は「推尊」に校す。

36.7　原文は「彡」。「分」の草書体。『草書の字典』に「彡」（後漢・張芝）とある。『元刊雑劇』に見える。

38.1　原文は「清浄」。陳歴明は「請神」に校す。「清浄」で問題ないように思われる。

38.3　原文は「幽」。劉念兹は「継」に校し，陳歴明は「幽」に読んでいるが誤り。「幽」の異体字。前稿の 16.6 で既に説明している。

38.4　原文は「縣」。「縣」の異体字か。待考。

38.4　原文は「凶」。「凶」の異体字。『正字通』に「凶，作凶，皆俗書」とある。『元刊雑劇』，『明成化説唱詞話』などに見える。

（ふくみつ・まさひろ　経営学部教授）